

## ごあいさつ

鏑木清方の業績を後世に広く伝えるため、ご遺族から鎌倉市へ寄贈された作品・資料と土地・建物をもとに、鎌倉市鏑木清方記念美術館は平成10年4月17日に開館し、平成20年で10周年を迎えました。

年間9回程度の展示事業を軸に、作品の保存修復、清方画業の調査研究と叢書図録の発行、講演会や子どもプログラムなどの教育普及等の事業を行い、市民はもとより、全国の清方愛好者に親しまれ今日に至っております。

この度、10周年を契機に、これまでの活動の記録をまとめました。今後は、鏑木芸術の更なる普及をめざし、その貴重な遺産を後世に伝えるため、力を尽くしていく所存です。

今日に至るまでご理解とご援助いただきました多くの方々に対しまして深謝いたしますとともに、これからの美術館活動に、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

館長 真室 佳武

# 目 次

ごあいさつ

目次

<b>I 開館記録</b>	
1 沿革	1
2 主な事象	4
3 基本構想検討委員会名簿	5
<b>II 活動記録</b>	
1 展覧会	6
2 教育普及	
1 講演会	43
2 展示解説	44
3 子どもプログラム	47
4 市民サポートスタッフ	48
5 館外活動	48
6 映像コーナー	50
7 図書コーナー	50
3 収集・保存	
1 収蔵作品数	51
2 追加収集作品目録	52
3 保存修復作品	52
4 貸出事業	59
4 調査・研究	
1 刊行図録	61
2 アンケート概要	63
5 広報・宣伝	67
6 共催事業	67
<b>III 資料</b>	
1 施設概要	68
2 利用案内	68
3 入館者数	69
4 美術館設置条例	71
5 ミュージアムショップ商品目録	74
<b>IV 紀要</b>	
1 『黒衣』から『ボランティア』へ 倉田公裕	76
2 鎚木清方の好んだ画室 宮崎 徹	78
3 鎚木清方関連文献一覧 清水玲子	89
4 他館における鎚木清方作品展示の展覧会記録 渡邊 泉	96

# I 開館記録

## 1 沿革

### 1. はじまり

平成2、3年頃、鏑木清方の長女の婿、山田肇氏(当時 明治大学名誉教授、演劇評論家)は、鏑木清方の作品の散逸を防ぎ、その業績を永く後世に伝えるため、清方の終の棲家となった土地、建物及び所有する作品等を活用した、記念館の設立等について横浜美術館等に相談された。

その意向は、鎌倉市に伝えられ、市は受け入れ等の準備を始めた。平成5年8月、山田氏は急逝された。しかし、その遺志はご遺族に引き継がれ、同年10月、寄贈の意向が正式に市に伝えられた。市は実現に向けて調整を行った。作品・資料は管理の安全を期するため、11月、横浜美術館の収蔵庫に移され、調査がなされた。

平成6年3月に土地建物が、6月に作品の一部が寄贈された。その後、横浜美術館に保管されていた作品は、平成8年9月から順次、開館準備の担当が詰めていた鎌倉文学館へ移管され、寄贈の手続は5回に渡り行われた。

### 2. 鎌倉市美術館構想

市は、平成6年7月、上野豊氏(鎌倉風致保存会会長)を座長とする、「(仮称)郷土記念館・美術館基本構想検討委員会」を設置し、その中で鏑木清方記念美術館の構想を練った。鎌倉の特性を活かした美術館設置のため、6回の検討が重ねられた。

第1回は平成6年7月14日に開催し、役員を選出を行い、市の基本の方針が示された。その後第2回(9月29日)に分館構想が提案され、館の目的や性格を、第3回(11月30日)では既存建物を活用する設計試案をもとに検討され、保存部分は画室と客間という方向が打ち出された。第4回(平成7年1月25日)に機能・規模・構造・設備・組織・運営に及び、第5回(4月26日)で素案が出され、第6回(5月31日)に基本構想がまとめられた。

その結果、同年6月に報告書が提出され、鎌倉市の美術館は、鎌倉ゆかりの作品の収集・展示・研究などの機能を持つ美術館とした。一館集中型でなく、中枢機能を備えた本館と、美術家の住宅などを活用した分館(記念美術館)からなる「分散型美術館」とし、地域の中に既に美術館が点在する鎌倉の特性を生かした美術館構想が打ち出された。

### 3. 記念館の建設

平成7年、鏑木清方の旧宅は、老朽化のため既存家屋を保存活用する方針を変更し、解体することになった。美術館としての機能を備えるためであった。可能な限り部材を再利用して画室を復元したり、清方の足跡の紹介や、遺愛品の展示ができ、市民が鏑木清方の芸術について語らえる多目的ホールや、天井高・照明・空調に配慮した落ち着いた雰囲気での展示室、その他資料室、収蔵庫、事務室等を設けることになった。